Ｎｏ．５１３【２０２２年７月１５日配信】

竹内俊吉と俳句（担当：村上真美）

こんにちは。歴史資料室の村上真美です。

今回は、竹内俊吉に関するお話をします。
竹内俊吉は、昭和 38 年（1963）から昭和 54 年まで青森県知事を務めた人物です。
詩や短歌、小説、絵画、俳句、演劇など何でもこなした文化人でもありました。

県庁を訪問した黒石よされ一行との記念撮影
（1964 年 8 月 5 日 青森県所蔵県史編さん資料）

その中で、私が注目したのが俳句です。竹内は、昭和 24 年 49 歳の時に句集『雪』を出版しています。また、俳誌『春燈』に投句を続け、昭和 43 年から昭和 52 年の間に約 300 句が掲載されました。

また、上京するたび春燈の句会に参加し、句友と交流を深めました。
そこには、春燈主宰の安住 敦（あずみあつし） を中心に、文学座の龍 岡 晋（たつおかしん） などの芸術家が集まっていたようです。俳句を作り、食事や談笑して過ごしていました。
東京出身の安住敦と千葉県出身の鈴木真砂女（すずきまさじょ）を青森ねぶた祭に招待し、県庁玄関前の特等席でもてなしたこともあったそうです。
昭和 38 年知事に就任してからも精力的な活動は続けていました。

そんな多忙な生活を送る竹内は、俳句を自身のスケジュール帳に書き込んでいました。
背広の内ポケットに入るサイズのごく普通のノートです。1 日の終わりにそれを秘書が取り出して、翌日のスケジュールを書いておき、翌朝また本人のポケットに戻す…の繰り返しだったそうです。予算のメモなどと一緒に、行く先々で感じたことを記録していました。
例えば、昭和 46 年に 3 期目の知事に就任した際、同年 3 月 1 日に「三度目の初登庁に風花す」と詠んでいます（『竹内俊吉の時代』「県政俳句抄」青森放送株式会社　1988 年）。俳句が彼の日記の代わりとして役目を果たしていました。

竹内は、知事の座を去ったあとも、亡くなるまで俳句を作り続けました。
86 歳で逝去した年に、親交のあった淡谷悠蔵が「泣くほど、辛いことがあっても涙を見せなかった君の一生だった」と語っています（『東奥日報』 昭和 61 年 11 月 28 日付「想いは遠く」）。

『竹内俊吉の世界』には、高松玉麗がさきのスケジュール帳の中から選句して収録された俳句があります。その中に「職責は飽くまで孤独梅雨もよい」、「知事故にそしらるる日を野分かな」とあり、孤独を感じ、嘆いた日々もあったのです。
人前で涙は見せなかったものの、知事としての苦悩を詠んだ俳句は遺されていました。

竹内俊吉が揮毫した「りんご百年記念碑」（青森県庁）

※今回の内容は、『竹内俊吉の世界 竹内俊吉集成』（青森放送株式会社　1988 年）、『竹内俊吉の時代 竹内俊吉集成』（青森放送株式会社　1988 年）、竹内俊吉遺稿集編纂委員会『雁かへる日 竹内俊吉遺稿集』（北の街社　1987 年）、青森ペンクラブ会誌部会 千葉由紀子 編集『北の邊第十八号』（青森ペンクラブ　2015 年）などを参考にしています。